

町家における生活領域と道との関係に関する研究 －兵庫県丹波市青垣町佐治を事例に－

A Study on Residents' Territory of Machiya and the old Highway
- Case Study of Saji, Aogaki-cho, Tamba City -

○出町慎*1、岡絵理子*2
DEMACHI Makoto, OKA Eriko

Machiya in the Saji town along the old highway were built in so high density on the site with narrow width and long depth, that vigor of the town was invented naturally. However, these ways of residence became difficult by a change of the social environment and the lifestyle of people. In this research, it aimed to clarify how residents in the Saji town are living on the site. As a result, it became clear that the area of residents' livelihood is going away from the old highway. So, for revitalizing the town, in rebuilding and restoration of *Machiya*, it is important to devise the arrangement in space where the area of livelihood is connected with the old highway.

キーワード: 町家, 住環境, 街道集落, 生活領域

Keywords: *Machiya, Residential Environments, Town along the old Highway, Residents' Territory*

1. 研究の目的と背景

街道集落は、道に沿った間口が狭く奥行きが深い敷地に建つ町家¹によって構成される。これらの住まいが高密に集合することにより、商業地としての町の活気を生み出し地域の中心市街地としての役割を果たすと同時に、生業も含めた生活領域が道にあふれ出すことにより道を介した近隣コミュニティが醸成され、良好な住環境が形成される。また、町家の連なりは地域の歴史性を現在に伝え、独特な景観を創出している。

しかし、近年個人商店の廃業が相次ぎ、地域の高齢化や空き家、空き地の増加がみられ、町の活力の減退とともに、町並みの維持・継承も困難となっている。その要因として、商店を取り巻く社会情勢の変化や後継者不足があげられるが、町家という接道性の高い住まいそのものが、町の活気を減退させ、地域の居住者離れの一因となっているのではないかと考える。

町家や街道集落に関する既往研究は、歴史的な視点から暮らし方をみた研究²、町家の商業利用に関する研究³、

歴史的都市の併用住宅の住み方と改善についての研究⁴など多数あるが、店舗として利用されなくなった町家についての住み方の研究はみられない。

そこで本研究では、歴史的な町並みが残る兵庫県丹波市青垣町佐治市街地を対象とし、町家に住まう各世帯の、日常の生活領域について、敷地と道、敷地と町との関係に注目し調査分析することにより、持続的に居住できる地域づくりを目指した町家の再生や新しい町家の空間デザインの手法を見出すための基礎的な知見を得ることを目的とする。ここで言う生活領域とは、昼の日常的な生活空間と、夜の就寝空間をあわせた領域を指す。

具体的には、佐治市街地居住世帯を対象としたアンケート調査、街道沿いの町家を対象とした観察調査、街道沿いの町家で協力の得られた 30 軒の住宅のプランの採取とインタビュー調査の 3 つの調査を行った。

2. 調査対象地の概要

丹波市青垣町は兵庫県の中東部、日本海と瀬戸内海の

*1 関西大学環境都市工学部 TAFS 佐治スタジオ 研究員 Fellow Researcher, Studio of Saji, Faculty of Environmental and Eng.,

*2 関西大学環境都市工学部建築学科 准教授 博士(工学) Kansai Univ Assoc., Prof., Dept of Architecture, Faculty of Environmental and Eng., Kansai Univ

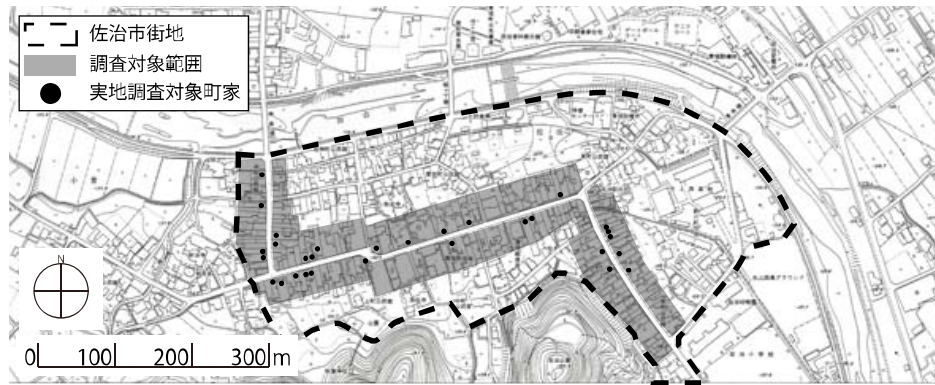


図1 佐治市街地と観察調査対象範囲、実地調査対象町家の分布

中間に位置し、周囲を山に囲まれた中山間地域の人口約7,100人の町である。佐治市街地は青垣町の中心に位置し、加古川(佐治川)に沿って発展した。江戸時代には、京・大阪と山陰を結ぶ古代山陰街道の宿駅として栄え、旧氷上郡内屈指の商業町を形成し、明治時代には、製糸業が隆盛を極めた。現在も街道集落を形成している平入り中二階町家や妻入り町家が混在する商家の町並みは、当時の宿場町の風景の面影を残している。しかし、かつて隆盛を極めた宿場町の活気は息を潜め、閑散とした町は衰退の途を辿っている。

図1は、佐治市街地を示す。現在の青垣町佐治(新町、東町、中町、荒神町、愛宕町、上町、本町)の居住世帯は236世帯で、そのすべてが自治会に加入しており、アンケート調査の対象世帯である。佐治市街地の中で街道に面する住宅はすべて町家であり132軒ある。これらに対し観察調査を行った。その中に、居住者へのインタビューを行った30軒の町家が点在している。

3. 町家居住世帯の生活実態

3.1 調査の概要

佐治市街地の総数居住世帯236世帯にアンケート調査を行った。アンケート票は2008年2月20日より自治会の協力を得て配布し、留め置き期間を1週間として郵送で回収した。各自治会別の配布数と回収数、回収率を表1に示す。

3.2 基本的属性

回収された131票の調査票の回答者の属性は、男性56.5%、女性41.2%、無回答2.3%であった。年齢の構成は、40歳未満6.1%、40歳代8.4%、50歳代29.0%、60歳代18.3%、70歳代36.6%、無回答1.5%であり、平均年齢は62.5歳である。

世帯の家族数は、単身家族が全体の18.3%を占めている。また、3人未満の小規模世帯が64.9%と半数を大幅

表1 アンケートの自治会別回収数と回収率

地域	配布数	回収数	回収率	
佐治市街地	新町	73	33	45.2%
	東町	17	13	76.5%
	中町	50	26	52.0%
	荒神町	28	23	82.1%
	愛宕町	23	17	73.9%
	上町	24	9	37.5%
	本町	21	10	47.6%
計	236	131	55.5%	

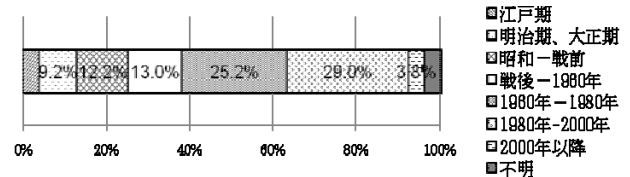


図2 住宅の最も古い部分の建設時期

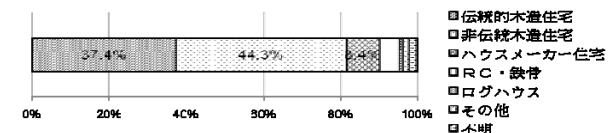


図3 住宅の建て方

に超えていた。平均家族人数は3.06人であった。

3.3 住まいについて

世帯の居住する住まいの階数は、平屋6.1%、2階建90.8%、3階建2.3%(無回答0.8%)であった。

図2に住まいのもっとも古い部分の建設時期をたずねた結果を示す。江戸期から戦前に建設された住宅は25.2%、戦後から1960年までに建設された住宅は13.0%、1960年から1980年までに建設されたものが25.2%、1980年から2000年までに建設されたものが29.0%、2000年以降に建設されたものが3.8%であった。回答者の54.2%は1960年から2000年までに建設された住宅に住んでいる。

住まいの建て方について、「戦前からあるような伝統的な建て方の木造の家(以下伝統的木造住宅と記述する)」、

表2 住宅の建て方別敷地の中にあるもの

建て方	離れ	蔵	物置、小屋	畑	前栽	井戸	駐車場
伝統的木造住宅(49)	38.8%	12.2%	65.3%	32.7%	51.0%	30.6%	44.9%
非伝統木造住宅(58)	29.3%	5.2%	56.9%	31.0%	32.8%	27.6%	44.8%
ハウスメーカー住宅(11)	18.2%	9.1%	45.5%	18.2%	27.3%	18.2%	45.5%
RC・鉄骨(7)	28.6%	0.0%	42.9%	14.3%	14.3%	0.0%	42.9%
その他(3)	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	33.3%	0.0%	33.3%
総計(128)	31.3%	7.8%	57.8%	28.9%	38.3%	25.8%	44.5%

表3 住宅の建て方別住宅にあるもの

建て方	床の間	道に面した縁側	土間	道に面した座敷	座敷	囲炉裏	茶室
伝統的木造住宅(49)	79.6%	55.1%	49.0%	20.4%	28.6%	6.1%	0.0%
非伝統木造住宅(58)	75.9%	51.7%	25.9%	10.3%	8.6%	1.7%	5.2%
ハウスメーカー住宅(11)	54.5%	27.3%	0.0%	36.4%	9.1%	0.0%	0.0%
RC・鉄骨(7)	57.1%	0.0%	28.6%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%
その他(3)	100.0%	66.7%	100.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%
総計(128)	75.0%	48.4%	34.4%	17.2%	15.6%	3.1%	2.3%

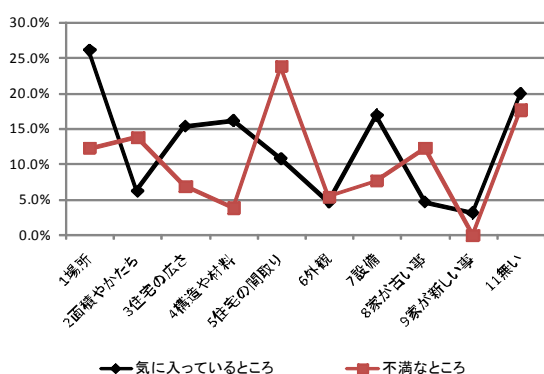


図4 住まいの評価

「木造だが伝統的でない建て方の家(以下、非伝統的木造住宅と記述する)」、「ハウスメーカーの住宅」、「鉄筋コンクリートや鉄骨の家」、「その他」の選択肢でたずねたところ、伝統木造建築と答えた割合は37.4%、非伝統木造住宅(と答えた割合は44.3%であった。木造の住まいは全体で81.7%であった(図3)。非伝統木造住宅の中に、江戸期に建てられた住まいも含まれている。これは改造が施されたものと考えられる。

住まいの敷地の中にある建物や場所についてたずねた(表2)。物置・小屋がある住まいは全体の57.8%であった。また離れや前栽(定期的に剪定の必要な庭)のある住まいは、伝統的木造住宅の敷地で最も多いが、全体としてもばらつきが無く、住宅の建て方が新しくなっているにもかかわらず、敷地の使われ方は伝統的なままの敷地が多いことが分かった。28.9%の敷地に畑があり、町家でも敷地の奥に畑を所有していることがわかる。敷地の中に駐車場があるのは全体の44.5%であり、伝統的木造住宅で44.9%、非伝統木造住宅で44.8%と高く、何らかの形で駐車場を確保していることが分かる。

住宅にあるものをたずねた(表3)。床の間を持っている住宅は全体で75.0%ある。道に面した縁側を持ってい

る住宅は、伝統的木造住宅で55.1%であり、また土間を持っているのは伝統的木造住宅で49.0%であることから、伝統的木造住宅の多くは街道と接する設えを持っている事がわかる。また非伝統的な木造住宅やハウスメーカー住宅等では、道と接する設えを持っている割合が低くなっていた。

3. 5 住まいへの評価

住まいの「気に入っているところ」と「不満なところ」を同じ項目を用いてたずねた(図4)。「気に入っているところ」は、上位から「場所」、「設備」、「構造や材料」、「住宅の広さ」で、「不満なところ」は、「住宅の間取り」が25%近くと不満度が高く、次いで「敷地の面積や形」、「家が古いこと」が次いであがっている。町の中心である市街地にあることについての満足度は26.6%と高いものの、不満も12.2%となっており、町家の敷地やプランへの不満が高い。

3. 6 今後の住まい手

回答者自らの居留意向と、次の世代の居住の継続についてたずねたところ、自らは78.0%が「住み続ける」9.8%は「住み続けるしかない」と答えているが、次世代の居住については、39.2%が「住み続けてほしい」と答えているものの、28.8%は「住み続けるのは無理だと思う」、8.8%は「住み続ける人は既にもいない」と答えており、楽観的に見ても4割しか継続居住の可能性がないことがわかった。

4 町家の生活領域

4. 1 街道沿いの町家の概要

佐治市街地の街道に面する町家132軒を対象に観察調査を行い現在の居住の実態を調査した。調査を行ったのは、2008年3月である。その結果を図5に示す。街道沿いの町家132軒のうち、居住者がいる町家は119軒、空



図5 佐治市街地の街道に面する町家の現在の住居の状態

空き家は13軒(9.8%)であった。居住者がいる町家は、次の3つに分類される。店舗を営む町家(店舗土間町家)は22軒(16.7%)、土間のある町家(空き土間町家)は60軒(45.5%)、土間空間をもたない町家(土間なし町家)が37軒(28.0%)であった(図5)。空き土間町家の多くは、かつてあるいは近年まで店舗が営まれていた町家である。また観察調査より街道に面する町家132軒の接道状況を調査した。ここでは、車道に接することを接道の条件とする。敷地の1面が接道している町家は111軒、2面が接道している町家は19軒で、そのうち敷地に対してL字型に車道が接している場合(以後L字型と称する)が17軒、敷地に対し前後で車道と接している場合(以後前後型と称する)が2軒であった。また3面接道している町家は2軒であった。1面接道している町家は、全体の84.1%で、大半を占めている事が分かる。

4. 2 生活領域調査の概要

町家132軒の中から協力の得られた30軒に対し、プランの採取と昼の生活空間と夜の就寝空間＝生活領域の位置に関するインタビュー調査を行った。調査は、2008年3月25日から27日の3日間おこなった。

調査対象の分布は図1に示す。

4. 3 町家の空間構成と生活領域

店舗の有無と土間の有無からみた町家の3分類(店舗

土間町家、空き土間町家、土間なし町家)と生活領域と道との距離により、住まい方を5つの型に分類した(図6)。

以下、各構成の型ごとに空間構成上の特徴を述べる。

1) 店舗土間町家

現在店舗を営んでいる町家にはすべて土間がある。街道に店舗利用されている土間空間が面し、その背後に居住空間が続く。店舗の出入口が玄関になっている場合と、店舗の出入り口とは別に玄関を設けている場合がある。日中は土間で過ごしているため、土間空間を中心に生活領域が形成され、生活領域が道と連続し、道に生活領域がにじみ出てくる。また土間空間では、客と住人の直接的な接触だけでなく、道を行く人との「見る・見られる」といった間接的な接触が生まれる。

2) 空き土間町家

土間のある町家である。土間空間の背後に居住空間が続く。土間空間の使われ方として、駐車場、物置・収納、趣味室、喫煙所などが見られた。特に駐車場として使っている場合が30軒中9軒あり、浄化槽を設置する場所となっている。店舗土間町家と同様に土間空間が玄関としての機能を持っているが、街道に面する出入り口は閉め切られていたり、カーテンで閉ざされていたりする場合が多く、ヒアリング調査でも「昔は隣近所へは土間からガラガラ入っていくのが当たり前だった」「土間の建具

がピシッと閉じていて入りづらい」「店が減り、まちに出る機会が減った」といった意見が多く聞かれた。

道と生活領域との距離に応じて生活を3つの型に分類することができる。以下、3つの型の特徴について述べる。

①道近町家生活

土間空間に接して生活領域がある場合であり、その奥の居住空間は空き部屋となり、そこは客間として使用している。生活領域と道の距離は近く見えるが連続はしていない。また居住空間に比較的大きな中庭を持っている場合が多く見られる。生活領域と道は連続していないが、夜になると道から土間空間を介して居住空間の明かりを確認することができる。

②道遠町家生活

土間に接して居住空間が続くが、生活領域と道の距離は遠い。この場合、居住空間は既存の町家の後ろに新たに

増築されている場合が多い。土間に近い居住空間は空き部屋となり、仏間や物置、寝室として使用されている場合が多くみられた。本調査では、「道遠町家生活」最も多く見られた。生活領域は敷地の奥へ移り、道と生活領域の距離は大きく離れてしまっており、道と生活領域は土間空間と空き部屋によって、分断されている事が分かる。また街道から見ても、内部での生活の様子、気配を窺うことができず、一見空き家と区別が付かない。ヒアリング調査の中でも「隣近所や町の様子が分からない」といった意見が聞かれた。土間が玄関の役割を果たしてはいるが、敷地の奥にある畑の手入れなど、住宅の奥からの出入りも多くみられる。ヒアリング調査の中から、「家の中が暗い」「日当たりが悪い」などの意見が聞かれ、生活領域が敷地の奥にあることが要因の一つとして考えられる。2階部分が生活領域になっている町家があったが、これも「道遠町家生活」に分類することができる。

店舗土間町家	空き土間町家			土間なし町家
	道近町家生活	道遠町家生活	道遠離れ生活	
7軒/30軒	7軒/30軒	10軒/30軒	3軒/30軒	3軒/30軒

※調査対象30軒の内の事例数を表している。

図7 佐治市街地の街道に面する町家の空間構成と生活領域の関係

③道遠離れ生活

既存の町家の背後に離れを建てて、その離れを生活領域として利用している生活である。離れは、既存の町家を増築している場合と別棟で建てられている場合とがある。離れの建て方には、木造住宅やハウスメーカー住宅が見られた。またこの場合、既存町家の居住空間は物置として、また土間が広い場合は駐車場として使用している。既存町家には仏間や座敷があり、掃除や手入れが行き届いている。基本的に生活領域は離れにあるため、空き土間町家の中では、道と生活領域との連続性が弱い。また離れの玄関へは、既存町家の通り庭を通過する必要があり、既存町家の玄関が住宅の玄関となっている。この事がさらに道との接触を少なくする要因になっている。

3)土間なし町家

土間空間を持たない町家がこれに分類される。この中でも、町家が直接道に面する型と前庭や駐車場をはさんで街道に面する型とがあり、道には接しているが、土間空間に見られる連続引き戸や座敷が道に接するときに見られる掃き出し窓等の道に対する積極的な設えはされていない。生活領域は、道に比較的近い場合も離れている場合も見られるが、いずれにせよ町家がと連続したしつらいになっていないため、生活領域は道と断絶している。

5 まとめ

本研究を通じて以下の事が明らかになった。

- 1)佐治市街地では住宅が建て替えられていても、敷地の使われ方は伝統的なままの敷地が多いことが分かった。しかし、住民の中では敷地の形状に対する不満が高い。
- 2)道に面する町家の多くは1面接道であるにもかかわらず、駐車場を持っている住宅が半数近くあり、道に面する土間空間が駐車場として使われている場合が多い。
- 3)道に面する町家の半数近くは空き土間町家であり、店舗土間町家は生活領域と街道が近接し連続しているのに対し、空き土間町家では、土間空間を介して生活領域と道との距離が遠く離れ、生活領域の町家から道への連続性は失われている事が分かった。
- 4)インタビュー調査の中から、近隣との接触機会の減少や近隣付き合いの変化に対する悲観的な意見が多く、生活領域と道の関係の改善へのニーズの高さが明らかとなった。

6 考察

町家に住まう各世帯の、生活領域について、道や町と

の関係に注目し調査分析するなかで、街道集落の町家の居住者の生活領域は道から遠ざかっており、生活領域と町との関係が希薄になってきていることが明らかとなった。これらが本来、町家が高密度に集合し、土間空間にある生活領域が道に連続し、さらに周辺町家の生活領域と重なるように連続することで作り出していた町の活気や近隣コミュニティを弱体化させる要因であると考えられる。しかし、問題は生活領域と道の関係だけにあるのではなく、敷地の形状や住居プランへの不満といった、住まい手のニーズに現状の町家が対応できていない点や、駐車場の確保といった問題は町の問題として対処していく必要がある。

今後、個別の町家の建て替えや修復においては、生活領域が道に近い空間に発生するよう空間配置を工夫し、その居住空間と道が祭りなどの特別な行事の折には連続するようなファサードのデザインといった道に対する積極的なしつらいを工夫することが、町の再生を促すと考える。その際、生活領域と道とを連続させる手法として、店舗型のような直接的な接触だけではなく、見る・見られるといった間接的な接触機会を作り出す手法が重要になると考える。さらに個別の町家からの視点だけでなく、人が過ごす空間として道をとらえ直し、人と人とが出会い、交流する場として道および町の整備を行うことが重要であり、町の視点から生活領域とまちを連続させる空間デザインを提案していく必要がある。

¹ 「町家」の定義は様々であるが、本論文では上田篤(1985)「流民の都市とすまい」p.198で定義されている「通りに面し、軒をつらねた都市の一戸建住宅」を指すものとする。

² 中村精二(2000)「婚礼儀礼から見た岡山地方の町家の座敷について」日本建築学会計画系論文集、NO.534、pp.291-298

³ 篠原曜子ほか(2001)「奈良県大宇陀町松山地区における町家の商業的利用に関する研究」日本都市計画学術論文集、NO.36、pp.211-216

⁴ 清水肇ほか(1994)「京都市中心部における併用住宅の隅方と改善の経歴に関する研究」日本建築学会計画論文集、NO.456、pp.189-198